建設産業図書館所蔵

建設関連小説の紹介

当館所蔵の建設に関する小説の中から、
２０２４年に出版された作品をご紹介します。

建設関連文学の書架

瑕疵借り　奇妙な戸建て

（角川文庫）

松岡圭祐(著)／KADOKAWA／2024 年

事故物件に住むことで瑕疵を軽減する「瑕疵借り」を生業とする藤崎達也のシリーズ第二弾。

藤崎は、ふとした事件から知り合った秋枝という男の指名を受け、彼の持家で瑕疵借りを引き受けることとなる。秋枝は静かな田舎町に中古の戸建てを購入したのだが、失踪したある母娘を殺害したと、近隣住民から執拗に攻め立てられていたのだ。藤崎は秋枝の無実を証明するため調査に乗り出すが…。

前作はオムニバスのヒューマンドラマだったが、本作は長編ミステリーとなり、より主人公らしくなった藤崎と出会えるのも魅力の一つ。

壁から死体？＜秘密の階段建築社＞の事件簿

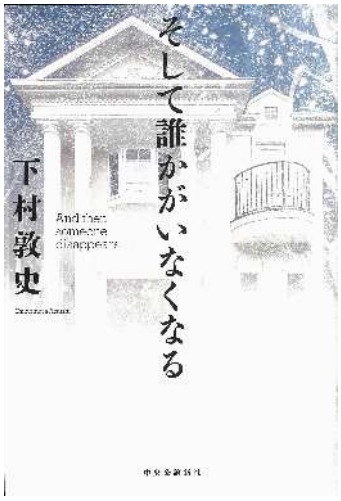
（創元推理文庫）

ジジ・パンディアン(著)／東京創元社／2024 年

ラスベガスの花形女性イリュージョニストのテンペストは、舞台での事故が原因で失業し、父親が経営する＜秘密の階段建築社＞を手伝うことになった。皆が楽しむような不思議な仕掛けを造るのが仕事の工務店だ。

その初日、仕事先の古い屋敷の壁を崩したら、なんと死体が見つかった。しかも、それはテンペストの仕事仲間で彼女に瓜二つの替え玉役キャシディだった。１００年も前に造られた屋敷の壁の中に、なぜキャシディの遺体が…。テンペストは、仲間たちと共に謎に挑む。

＜秘密の階段建築社＞シリーズ第一弾。



そして誰かがいなくなる

下村敦史(著)／中央公論新社／2024 年

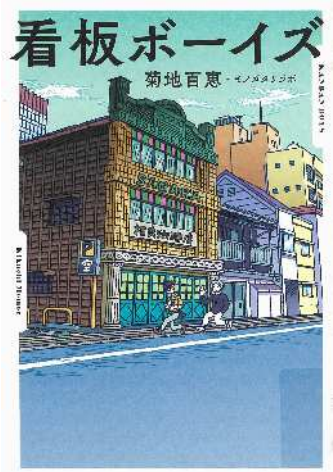
本作は、なんと著者の自宅が舞台となる推理小説。なにかが起こりそうな洋館というコンセプトで 2020 年に建てられたその家は、エントランスから部屋ごとに古代ギリシャ、ビクトリアン、ロココ、バロックなどと、これでもかと種々のヨーロピアン形式が詰め込まれている。

物語序盤の設計担当者との打ち合わせシーンは、相手側が実名であることを考えても、おそらくこんな風に楽しんでいたのだろうと想像できてほほえましい。

筋書き自体は、推理小説になじみのない私でも早々に犯人が誰であり、誰それの正体はこうでありと察しがついてしまうので、さほど練られたものとは思えない。おそらく、この小説は、著者自身と建築に携わった設計者や大工など多くの人々にささげるためのものなのだろう。

ちなみに、舞台となった著者の自宅は、「新築またはリノベーションを関西圏にてご検討の方に限り」見学ができるそう。詳しくは下記の URL をご覧ください。

https://www.univer-sys.com/atsushi-shimomura/



看板ボーイズ

菊地百恵＋モノガタリラボ(著)／イマジカインフォス／2024 年

神田神保町に建つ相良珈琲店は、築９０年以上にもなる看板建築だ。看板建築とは店舗と住居が一体となった建物で、正面は文字通り看板のように、モルタルや銅板などを用いて意匠を凝らしている。

店主だった祖父が亡くなって一年ほど。相次いで父を事故で亡くした公務員の誠は、短い期間にはなるが相良珈琲店に住むことにした。なぜ短いかといえば、相続税が払えないから売却しなければならないのだ。

その新天地で誠を待っていたのは、まったく面識もない押しかけ居候のワタルだった。正体不明だが美形で屈託のないワタルと、誠との奇妙な共同生活がはじまった。そして、押し入れから看板建築のイラストがたくさん描かれた父のノートをみつけ、ふたりは週末にそれらをめぐる旅にでることにした。

主人公たちが訪ねる看板建築は、ドラマ「絶メシロード」にも登場した埼玉県秩父市の「パリー食堂」など実在する。また、相良珈琲店の存続をめぐるラストのどんでん返しも楽しめた。

バリ山行

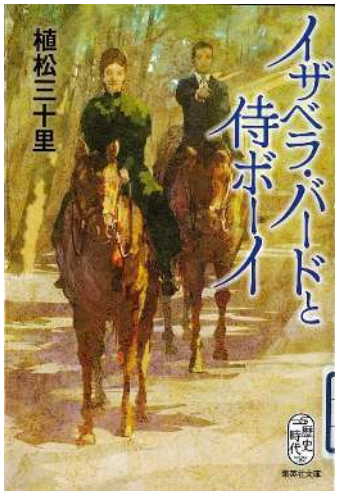
松永 K 三蔵(著)／講談社／2024 年

タイトルの「バリ山行」とは、登山者自らがルート構成をして、道なき道を行くバリエーションルート登山のこと。主人公の波多（はた）は、内装リフォーム会社からリストラされ、外装修繕を専門とする新田テック建装に転職した。しかし、小口の直接受注を切り捨て、大口取引先の下請けに注力するという経営方針転換が原因で業績が悪化し、転職先でもリストラの噂がささやかれるようになる。

そんな険悪な雰囲気もどこふく風と、週一回のバリ山行にでかけるのは、ベテラン社員の妻鹿（めが）だ。彼は勤続年数 15 年以上だが、付き合いの悪さで孤立し、さらに営業方針転換に逆らって小口修繕などを淡々とこなしていることから、リストラ第一候補とされていた。

自分も危機感をもつ波多は、そんな妻鹿のバリ山行に興味をもち、すすんで同行することにしたが…

本作は、2024 年度の芥川賞受賞作であるが、著者は建築関係の会社に勤務していることもあり、修繕施工の描写や中小建築業の実情もリアルで、その方面からも楽しむことができる。



イザベラ・バードと侍ボーイ

（集英社文庫）

植松三十里(著)／集英社／2024 年

イギリス人の紀行作家イザベラ・バードが、明治 11 年に横浜から東北、北海道へと旅をした際の紀行文『日本奥地紀行』に取材した小説。伊東鶴吉（実際には伊藤）は、『日本奥地紀行』ではバードの観察対象にすぎなかったが、本作ではバードと並び主人公となり、彼の視点からも旅の様子が描かれている。

伊東は、母と幼い妹たちを養うために通訳の仕事をしており、給金が良かったことからバードに同行するが、彼には箱館で旧幕府軍として戦った父親の消息を尋ねるという目的もあった。また、貧しい日本を海外に知られたくない伊東は、バードに不信感を抱きつつも、旅を続けるうちに彼女の真意を知り、理解するようになる。

本作を読んでイザベラ・バードと、彼女が見た当時の日本にご興味を持たれた方は、ぜひ『日本奥地紀行』も手に取ってほしい。当館でも所蔵している。さらに、渡辺京二の『逝きし世の面影』は、日本が失った江戸の文明を、外国人の見聞記から読み解いており、バードの紀行文も多く引用されているので、併せて読んでいただきたい。